

いしずえ

2025 4・5・6 月号
〈合併号〉

第650号 2025・6・29 〒166-0003 東京都杉並区高円寺南2-33-32 TEL 03-3314-5688 FAX 03-3314-8954

イエス様の痛み

ある教会で初聖体の準備をしていた時のことです。ミサの中でこれからみんなも食べることになるパンは、パンに見えるけれどイエス様なんだよ、という話をする、一人の子が「イエス様を食べちゃうの。痛そう。そんなひどいことしたら、地獄に落ちる」と言いました。その子の鋭い感性にはとさせられました。確かに誰かに体を食べられるならとても痛いことでしょう。そして誰かを食べてしまうということは本来、相手にとつてとてもひどいことのはずなのです。それなのに私たちは、イエス様はパンの形になられたので、食べられても痛くないと決めつけて、このこと、つまりイエス様の痛みにあまりに無頓着になっていたのかもしれないという気がします。だから、イエス様が少しでも痛くないように、ご聖体は噛まずに、口中で溶かしましょう、とかいう話をしたいのではありません。イエス様の痛み、それは実際に口にはいる時にご聖体を感じる痛みというよりも、ご聖体としてご自分を私たちに差し出すために経なければならなかった、十字架の苦しみに

主任司祭 高木 健次

のことです。そして十字架は人類が神を拒否した結果ですから、本来は地獄に落ちるということと外的な発言ではないと言えます。ご聖体の本質は、それにもかかわらずイエス様がご自分を食べなさいと差し出されているということにあるのでしょう。だから私はその子に言いました。「確かに痛いだろうね。痛くても、イエスさまは僕たちの中に入って一緒にいたいから、それを食べてほしいと言っているんだよ。ぼくたちを地獄から守りたいから」と。わたしたちが自分はイエス様を傷つける者ではないからご聖体を頂けると考えるなら、ご聖体の意味を、そこにこめられたイエス様の思いを見失うかもしれない。わたしたちこそイエス様を傷つけてしまう者。それでもイエス様はご自分が傷つけない、痛くない方ではなく、痛くてもわたしたちの中にいつも共にいることを選ばれた。その思いを受け取るのが聖体拝領でしょう。だから私たちはそんなイエス様に感謝をもって、そして痛みをもってご聖体のイエス様をお迎えしなければならぬと気づかされた体験でした。